

ICT 活用と AL の実践を通じたコミュニケーション力の向上

鳴門教育大学大学院 学校教育研究科 高度学校教育実践専攻
教職実践力高度化コース 指導教官 藤原伸彦
大川村立大川中学校 吉田マリア

1 はじめに

本校は、早明浦ダムの上流に位置し愛媛県と接する高知県大川村にあり、離島を除くと、全国で最も人口が少ない（2018年7月現在村民402名）村唯一の小中学校である。2005年に統合し、施設一体型小中一貫校として大川小中学校は13年目を迎えた。全校児童生徒は28名（小学生12名、中学生16名、2018年10月現在）であり、そのうち山村留学生12名（小学生2名、中学生10名）となっている。年度始めだけではなく、2学期や3学期から新たに留学生や移住に伴う転校生が入ってくるケースがある。その場合、人間関係や信頼関係のリスタートになり、新たな課題が出てくることもある。そのような流動的な人間関係において、コミュニケーションというものは、お互いを理解し合う上で欠かせないものだと思っている。

2 研究目的

(1) 研究設定の経緯

児童生徒は地域と深く関わり、少ない人数でそれぞれが様々な体験を通して、街の学校では学ぶことのできない貴重な学習をしていると実感している。一方で、児童生徒には『新しい人間関係を自らつくりだしていく力』がついていないという課題があった。そこでこれまでの授業改善を中心とした「学力の向上」の取組を発展させ、昨年度より、「進んでコミュニケーションを図ろうとする子どもの育成～探究的・主体的授業づくりとコミュニケーションの場の工夫を通して～」という研究主題を設定し、「コミュニケーション力の向上」を重点に、研究と実践を進めてきた。また、本校はICT活用教育の村指定を3年間（2015年～2017年）受けてきた。全校児童生徒の約4割が山村留学生であり、彼らの地元は広範囲にわたるため、夏季休業中の登校日などを設定することが難しい。通常中学3年生になると進路に向けて学校外で学習施設などに通うなど学力向上を図る生徒もいるが、大川村にはそのような施設環境が無い。そこで小規模校のメリットを活かし、一人一台のタブレット学習、家庭学習のための持ち帰り、Wi-Fiルーターの家庭数での貸し出しなど、高知県内でもトップレベルのICT環境を実現させ、日々の学習や長期休業中のやり取りを進めている。こうしたICTの活用、授業改善の取組、学級づくり、学校行事、児童生徒会活動などを通して、発表する力、他人と関わる力、コミュニケーション力の向上への手立てとしての効果を得た。しかし昨年度の総括では、①「場に応じたコミュニケーションができない」、②「相手に伝えようとする意識が弱い」、③「相手に伝わる気持ちの良い挨拶ができない」の3点が課題として挙げられた。これらの課題を解決するためには、児童生徒の意識・実態をよくつかむとともに、探究的・対話的な授業へとさらなる授業改善を進めることによってコミュニケーション力を高めること、授業外の学校生活におけるコミュニケーション力を高める場の工夫、日常的に接することのない学校外、地域外の人と交流する場の工夫を続けることが必要である。県下でもトップレベルで整っているICT環境の中で、学校内だけに限らず、地域学習を通して、人との関わりの上で「コミュニケーションポイント」「相手意識」といったことを常日頃から意識付けさせていくことで、児童生徒のコミュニケーション力の向上へつながっていくのではないかと考え、上記研究主題で研究、実践を進めていくこととした。

(2) 実態把握

5月に児童生徒及び教職員に対して実態把握のためのコミュニケーションに関する意識調査を実施し

た。「児童生徒は自分の思いや考えを相手にうまく伝えられている」（設問1）と感じている教職員は、35%（17人中6人）だった。児童生徒アンケートの結果では、64%（25人中16人）が肯定的な回答をしており、教職員と児童生徒の間で大きな差異が見られた。差異が見られた原因として、教職員の児童生徒に対する期待が高いことと、また児童生徒は客観的に自分たちを見られていないことがある。また苦手と感じている理由については設問1（2）で、77%の児童生徒が「言いたいことがあっても、どのように言えばいいのかわからない」、66.7%が「話そうと思うと緊張する」と答えていた。

今後の方向性として、授業や学校行事などにおいて、児童生徒が「自分で考えてみたい、やってみたい」「他の人に伝えたい」「問題を解決したい」と思うことのできる教材、内容を開発し、その学習や活動を通して「考えが深まった」「他の人と意見を出し合い、課題を解決した」というコミュニケーションを通じた問題解決の体験をどれだけさせることができるかということが必要である。また、「伝えることの緊張や不安」を克服するため、一人ひとりへの支援とともに、支持的風土、開放的で温かい学級や学校の集団づくりが求められていることがわかった。

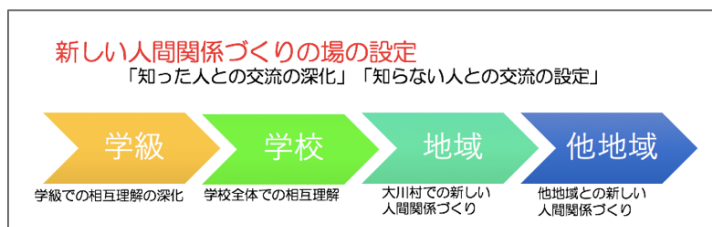
(3) 実習校での取り組みや計画

コミュニケーションについて学び実践できるようにする手立てとして、以下のことをあげた。

《課題に対する手立て》

[手-1]新しい人間関係づくりの場の設定

- ① 学級での相互理解の深化
- ② 学校全体での相互理解
- ③ 大川村での新しい人間関係づくり
- ④ 他地域との新しい人間関係づくり



[手-2]ICT活用

- ① iPad活用研修（児童生徒・教職員）
- ② タブレット端末活用による表現発表（各学級・教科・行事などでの取り組み）

[手-3]地域とのかかわりを重視した体験活動

- ① 児童生徒と村民によるワークショップ
- ② 地域での体験活動
- ③ キラキラフェスティバルでの学習発表

コミュニケーションについて学び実践できるようにする手立てとして、(1) 4～5月にチームづくりのためのグループワークトレーニング、(2) 6月には教員向けのICT活用研修、9～10月には児童生徒向けの情報活用能力の指導、(3) 9～11月には地域とのかかわりを重視した体験活動を計画した。

3 研究内容

(1) チームづくり（グループワークトレーニング）

ア「先生ばかり住んでいるマンション」

4月新しく新入生、新規留学生を迎えた新中1、新中2を対象に特別活動を実施。メンバーの一人としてグループの課題達成に参画し、メンバーとの協働作業（グループワーク）を通じて、人との関わり方を学び、「会話が噛み合う応答の仕方がわかる」「相手を攻撃しない自己主張の仕方がわかる」「他者を理解する仕方がわかる」「他者との折り合いのつけ方がわかる」ことを支援指導した。4月当初ということもあり、まだごちちなさ見られ、自分の考えを積極的に伝える姿が少なかった。しかし、振り返りで

は、「友だちが気付いてくれて良かった」などと伝え合うことの良さを感ずることができていた。



図1 中1の活動の様子



図2 中2の活動の様子

生徒の振り返り～記述～

- ・チームになるためには、みんなで助け合って協力していくことが大切。一人の力が足りないと課題を解決することは不可能に近い。みんなの力があってからこそ、課題を解決されることができる。学級目標の支え合うように、お互いに支え合っていけるチームにしたい。
- ・みんなでいろんな意見を出して、「A先生はここで、B先生はここ」とか言って意見がまとまり、とても良かった。1つの問題を協力してやれば、とても楽しかった。これからも4人のチームとして協力したい。

イ「マシュマロチャレンジ」

5月に全中学生、全小学生を対象に実施。マシュマロチャレンジは、知識理解だけでなく、コミュニケーションを発揮しながら創るものであり、コミュニケーション・協力がないと出来ない。またコミュニケーションの取り方が良いチームが成果をあげていることがわかった。そして、「ふりかえり」の時間を十分とったことで、チームを超えて、コミュニケーションをとることができ、次の活動への意欲と見通しを持つことができた。「マシュマロチャレンジ」は主体的・対話的で深い学びになる教材になるのではないかと期待される。



図3 中学生の活動の様子



図4 小学生の活動の様子

生徒の振り返り～記述～

- ・Eくんが色々なアイデアを出してくれていた。Fくんが、「こうしたほうがいい」と言ってくれた。今後私もいくつもアイデアを出し、何度も失敗したいと思いました。コミュニケーションは大切とよくわかりました。
- ・1人1人が意見を出し合って、まとまり、結局立たなかったけど、立たなかった後も、どうしたら良かったとか考えられて良かった。私が意見を出したら「それいいね」と言ってくれて嬉しかったです。

(2) ICT 活用研修

ア 6月教職員向け ICT 研修

大川小中学校では、ロイロノート・スクール（以下、ロイロ）という授業支援アプリを活用している。ロイロは、子どもたちからの発信を助け、共有、蓄積して、学び合うための教育 ICT ツールとなっている。子どもたちからの発信が容易になることでその機会が増え、自然と主体的に学ぶ授業へと変容していく。シンプルで使いやすいロイロは、先生たちの授業を便利にしながら、新しい双方向型の授業を実現することができるということを、模擬体験をしながら教職員に研修で伝えた。この研修を通して、4月に着任した先生方も授業でのイメージを持つことができ、研修以降、ロイロを授業の中で使える場面では積極的に活用し、思考ツール、表現ツールとして授業で実践することができた。

イ 9月・10月 児童生徒向け情報活用能力指導

10月の職場体験報告会に向けて、事前にNHK for schoolのデジタル教材を視聴させ、「調べる」「まとめる」「伝える」ことについて学び、プレゼンテーション作成や伝え方、「相手を意識すること」などについて指導を行った。練習の際には、自身の伝え方を振り返るためのチェックリストの活用をすることで指導を入れるポイントが明確になった。またタブレット端末のカメラ機能を使って、生徒が実際に発表している姿をビデオ撮影することで、生徒自身が客観的に自分たちの発表をチェックしブラッシュアップができるようになった。

チェックリスト *出来ていたところにチェック (☑) をお願いします。

☐わかりやすい言葉を使っていたか

☐発話は聞きやすかったか

☐聞き手を見て話していたか

☐スライドは見やすかったか

☐スライドを指しながら身ぶり手ぶりを入れて話していたか

☐スライドの切りかえのタイミングはよかったか

★最も大切なこと = 伝える相手を意識すること

コミュニケーションポイント

☐クリアボイス ☐ジェスチャー

☐アイコンタクト ☐リアクション (レスポンス)

☐スマイル ☐ポーズ (間)

<コメント>

図5 チェックリスト (NHK for school の改変版)

ウ 小学校外国語活動・外国語

小学校外国語研修ガイドブックでは、主体的・対話的で深い学びについて以下のように書かれている。

(抜粋)

- ① 主体的であるかについては、本当の自分自身の考えや気持ちを表現させることが非常に重要である。自分が本当に感じたことや経験したことを伝えたいと思って言語材料を使用させる。
- ② 対話的であるかについては、①対話する目的があること②対話する（伝え合う）内容が互いに未知であること。
- ③ 深い学びであるかについては、何を伝えると相手に「〇〇してみたいな」と思ってもらえるか。そのために、どのような言語材料を使うと良いか児童自身に考えさせる（選ばせる）。
「意味」「場面」「目的」を結びつけながら、言語材料を使用して、活動に取り組んでいるという状態にする。

小3・4では、児童が夏休みにタブレット端末で自分のお気に入りの場所の写真を撮り、ロイロノートを使ってプレゼンテーションを作成した。自分のお気に入りの場所を新しく来たALTに紹介ということで「伝えたい」という思いが強まり、進んでコミュニケーションを図ろうとする主体的・対話的な姿が見られた。「思考」から「表現」、「表現」から「発表」といった一連の学習そのものがアクティブラーニングとなっている。タブレット端末は、思考ツール、表現ツール、発表ツールを兼ね備えているので、児童がその過程をスムーズに行えるようにしてくれ、コミュニケーション力向上の手助けの一つにもなっていると考えられる。

また小5・6でも同様の活動を行った。特に、Chantsに合わせて英文を作成するという教材を開発し実践した。子どもたちが楽しみながら学ぶことができる手立てとなっていた。タブレット端末の有効性が見られた。すなわち、子どもたちの活動を撮影し、電子黒板につないで見せながら、具体的に評価することで、出来ていることと改善できるところが分かりやすく伝えることができた。また、教師にとっても撮影した映像を見ることで、指導のポイントを明らかにすることができた。

(3) 地域との「かかわり」を重視した体験活動（総合的な学習の時間）

本校では、小3から中3までが合同で行う総合的な学習の時間（以下小中合同総合という）を20時間設定している。11月には学校の三大大行事の一つであるキラキラフェスティバルという学習発表会があり、その場で小中合同総合の成果を発表することになっている。大川小中学校はコミュニティスクールであり、地域との関わりの中での学びが欠かせない。特に小学3年生～中学3年生が縦割り班を組んで行う、小中合同総合では、地域との関わりの中で学びを深めている。地域の人との関わりは、見知らぬ人との関わりとは違い、児童生徒にとって不安や緊張が軽減され、コミュニケーションが図りやすい。「関わりを通して、学んだことを伝えたい」という思いが生まれ、相手意識を持った「コミュニケーション力」の向上が期待できる。総合と教科との横断的なつながりとなるよう、各教科のカリキュラムの見直しや総合的な学習の時間と各教科との横断的な学びをマネジメントした。そこで今年度は地域の方との複数回のワークショップを提案し、学校や学校運営協議会の協力を得ながら実践した。地域に触れ、課題や良さについて子どもたちも教職員もコミュニティの一員としての自覚を持ち、自分事として主体的に、そして地域と対話的に共に学び試行錯誤を繰り返していくことで、深い学びへととなると考えた。また、その過程において、自分の考えをどのように伝えれば良いか、相手の考えをどう理解するのか、といった相手を意識したコミュニケーション力の向上へとつながっていくと考え、実施した。回数を重ねるごとに、子供たちの緊張もほぐれていき、地域の方とのコミュニケーションが増えていった。

実際に、学校運営協議会でのワークショップ後の聞き取り調査では、以下のような意見が出された。

(地域)

今日のような子どもたちとのワークショップは良かった。アイスブレイキングのようにもなっていて、後の要望の時にお互い意見がとても言いやすかったと思うし、子どもたちとの良いコミュニケーションの時になった。子どもたちも話し合いをワークショップという形で一緒にし、子どもが前に出て、話し合ったことを発表することで、問題や課題を自分たちのことと捉え、意識できたのでは。子どもの中でも気づきがあったのでは？今回ワークショップという場面を設定していたということに意味がある。

(子ども)

チームで分かれてワークショップをするとき、最初は緊張したけれど、途中からはほぐれてきた。去年よりは話しやすさがあった。ワークショップをすることで、要望のときには、あまり緊張せずに言えた。地域の人といろいろな意見が出せて良かった。愛校作業後のレクとか具体的な意見が出て参考になった。今回の方が良かった。

(教員)

チームに入ってそれぞれが分かれたことがすごく良かった。まず話をしたことを目の前の人に話すことワークショップの最後の発表の時に前に出て話を子どもがすることによって責任が生まれ、それを他の児童生徒に伝えざるを得ない必然性と継続性が生まれる。即興性というか、急に話を振られても話ができるように多少はなってきた。前で発表することになっても、物怖じせずに発表することができていた。ニコニコしながら発表できていた。



図6 地域の方とのワークショップ



図7 小中合同総合の活動の様子



図8 キラキラフェスティバル当日の様子

プレゼンテーションの内容については、①テーマやその設定理由、昨年度からのつながりについて、②地域の人・もの・こととの関わりを通して、課題発見や解決方法を模索し、提案しているのか、③全体の活動を通して、コミュニティーの一員として、私たちができることは何か、の3点を各チームが入れてプレゼンテーションをするよう提案し、探究的・継続的な学び（深い学び）につながるよう提案した。そして当日はそれぞれの方法でコミュニケーションポイントと相手を意識することを意識しながら表現することができていた。来場者からの以下のようなコメントを得た。

・少ない人数でそれぞれが様々な体験を通して、貴重な学習をしている様子が良くわかりました。聞く側にわかりやすいように伝える工夫がなされ、今後の社会で絶対的に力になる体験を得られるこのような機会があることはすばらしいと思います。

・緊張されていたでしょうが、堂々とすらすらと発表されていて、目頭が熱くなる瞬間もありました。他者に働きかけながら、地域社会の事を知り、自分自身を知り、成長されている姿に学ばされることがばかりでした。総合的な学習の成果発表においては、深く掘り下げられていおり、特に大川村のPRに関して、村の小中学生がこうして学びながら地域づくりに携わっていることが大川村の何よりの魅力なのではないかと思います。

4 まとめ

(1) 実践結果把握と考察

11月に児童生徒及び教職員に対して実態把握のためのコミュニケーションに関する意識調査を実施した。児童生徒に対するアンケートでは、相手にうまく伝えられていると肯定的回答をした者は、68%であった。(28人中19人)だった。人数だけを見ると5月の結果と変わらないが、5月に否定的回答をしていた児童生徒9人中6人が11月には肯定的回答に変わり、5月に肯定的回答をしていた6人が11月には否定的な回答をしていることが明らかになった。また11月には設問1(1)「相手にうまく伝わっていないと感じたり、苦手だと感じている」に対して、「全くない」と答えている児童生徒が4%(1人)から21%(6人)に増えているのは良い結果である。

教職員に対するアンケートでは、「自分の思いや考えを相手にうまく伝えられていると思いますか」に対して肯定的な回答をした者は、5月は35%と低かったが、11月には94%(18人中17人)と非常に高くなった。また、5月のアンケート結果では教職員と児童生徒の間で29%の差異が見られていたが、今回は、逆に教職員の肯定的回答が高い数値となっている。

課題の一つであった「あいさつ」についても、「あいさつを進んでする」に関する項目では、設問7「友達に」は肯定的回答が69%から71%、設問8「教職員に」は39%から56%、設問9「地域の人に」は33%から50%と、課題のあった「あいさつ」について、すべての項目で肯定的回答数値が上がった。根気強く、指導を続けてきた成果があったと考えられる。また、学校外など地域や村外の様々な人との出会いと交流の機会を持ち、あいさつをする機会をできる限り多く持ってきたことも成果の一つであると言える。

本実践では、学級や学校生活での人間関係づくりを行ったり[手-1]、「相手を意識すること」「コミュニケーションポイント」[手-2,手-3]を日々の授業などで繰り返し指導してきた。今回のようなアンケート結果が得られたのはそれらの継続的な指導・支援により、コミュニケーションをとることに對しての苦手意識が改善されてきたためだと推測される。これらの手立ての有効性が示されたと言えよう。

継続して苦手だと答えているものや新たな児童生徒の9人については、今年度は2学期から新たに転校生が入ってきたこともあり、人間関係や信頼関係の再スタートになったり、それ以外でも友だちとの関わりの中でうまくいかないことがあったりと色々な体験や経験を通して、新たな課題が出てきたことがあったと考えられる。そのような流動的な人間関係において、コミュニケーション力は、お互いを理解し合う上でますます必要となってくるだろう。

(2) 今後の課題

設問1において、否定的回答だった児童生徒の中でも、設問5『「コミュニケーションポイント」や「相手を意識する」ことを通してコミュニケーションがうまくとれるようになってきた』について肯定的回答をしているものが90%以上いた。これは、コミュニケーションをとることに對して苦手意識のある児童生徒でも、「コミュニケーションポイント」や「相手を意識する」ことを、日々の授業や学校生活の様々な場面で継続して指導してきたことで、スキルの習得によって「できるようになった」「できるようになってきている」と実感しているのだと思われる。教職員の肯定的回答も90%以上となっており高い評価となっていた。実践での取り組みを通してコミュニケーションに対する児童生徒と教職員の結果との大きな差異が見られてはいるが、教職員の肯定的評価が高くなっている。これはコミュニケーションに對して、教職員一人一人が課題意識を持ち、各学級や授業、行事などにおいて、継続的な指導をしてきたことで、児童生徒の成長を実感できた成果だと考えられる。今後は「教職員もみんなのコミュニケーション力の成長を実感している」と伝えていくこと、児童生徒自身が「出来た、出来るようになった」と実感できるようにフィードバックを行っていく必要がある。それをまだ苦手だと感じている児童生徒たちにとってコミュニケーション力の向上と自信へとつなげていきたい。

【参考文献】

- ・日本マシュマロチャレンジ協会 www.marshmallow-challenge-japan.org/
- ・坂野公信 監修 改訂学校グループワーク・トレーニング 株式会社図書文化社 (2016)
- ・坂野公信監修 協力すれば何かが変わる続グループワーク・トレーニング 株式会社図書文化社(2016)
- ・学校グループワーク・トレーニング3 日本学校グループワーク・トレーニング研究会著(2016)
- ・安斎勇樹著 早川克美編 協創の場のデザイン-ワークショップで企業と地域が変わる 幻冬舎(2014)
- ・紫牟田伸子著 早川克美編 編集学-つなげる思考・発見の技法 幻冬舎(2014)
- ・藤沢晃治「分かりやすい表現」の技術 意図を正しく伝えるための16のルール 講談社(1999)
- ・編集：秋田喜代美 対話が生まれる教室 居場所感と夢中を保障する授業 教育開発研究所(2014)
- ・中学校学習指導要領<平成二十九年度告示> 文部科学省
- ・小学校学習指導要領<平成二十九年度告示> 文部科学省
- ・文部科学省 教育課程部会生活・総合的な学習の時間ワーキンググループ
- ・田村学編著 中学校新学習指導要領の展開 総合的な学習編 明治図書出版(2017)
- ・小学校英語 研修ガイドブック 文部科学省
- ・大坊 郁男 コミュニケーションスキルの重要性 (2016)
- ・神奈川県立総合教育センター 平成26・27年度研究 (小学校・中学校・高等学校) 教員の「思い」から始まるコミュニケーション能力育成のための実践研究集 (2016)
- ・NHK for school 2018 番組&WEBガイド
- ・村川雅弘 ワークショップ型教員研修 はじめの一步 教育開発研究所(2016)